

バリアフリーについて

1 「一人一人を、人として大切にしていける社会」の実現

- ・障害があるからといって、生きる意味がない、違うということではない。
- ・乙武さんの話「不便ではあるが不幸ではない」 こんな風を感じられる社会が心のバリアフリー
- ・子どもの頃から障害のある方のことを知ることで、障害のある方と一緒に生活することが普通の社会に
- ・どんな障害があっても受け入れていけるような社会 一人一人を人として大切にしていける
- ・障害者は世話をするだけのものではない 障害者が生きる意味 健常者と同じ
- ・共に生きることが大切
- ・「ひととしてどの人も大切、どのひとも社会の担い手」
- ・「迷惑をかけながらも生きていくことが大切」
- ・「人間お互い完全と言うことはないのだから補い合うことが大切」

2 バリアは物理的なものだけではない。制度的、心理的等さまざまなバリアが存在する。

- ・物理的なものだけではない。物理的なバリアを除いても、制度的、心理的なバリアがあると、社会参加ができない。
- ・目に見えるバリアについてのバリアフリーについては、進んできたが、全ての障害者に使いやすいということはありません。障害の種類、度合によって異なっている、この点について理解することが重要。
- ・いま住んでいる環境におけるバリアフリーが大事。高齢者が住居の中で事故にあっただけで障害者になってしまうケースが増えている。
- ・障害者との関わり方、かわいそうだからという気持ちは大事だが、上からのあわれみ的な関係では、障害者にとってバリアーになっているかもしれない。
- ・障害者の自立を、親・福祉の職員が「福祉」という言葉で阻んでいることもある。
- ・障害者とはどのように接したらいいのか。
障害者といっても、みな違う。接していきながら理解していく。わからないことは相手に率直に聞いていく。
- ・視覚障害者にとっては必要な点字ブロックも、車椅子で移動するときは非常に大変。障害によって差がある。
- ・交通バリアフリー バス路線が便利

3 バリア=ハンディを持っている人は、障害者だけではない。外国人、ニート、ホームレス等幅広く考えていかなければならない。

- ・バリアフリーは障害者だけのものではないのではないかと。社会的にハンディを負った人が社会から取り残されていないか。 ニート、外国人、ホームレス等々
- ・外国人は言葉のハンディ、ホームレスは住所要件の欠如、ニートは教育の欠如といったことで、就労等社会参加が阻まれていないか。
- ・バリアフリーやニートは怠け者の問題？ 就労や社会参加についてハンディの解決が必要
- ・障害の範囲も広がっている。 学習障害、ADHD等
- ・障害は本人のことだけでなく、一緒に暮らす家族全体の問題でもある。障害者は人口の5%といわれているが、その何倍のひとが関わる。
- ・「社会的排除や摩擦」 社会全体として排除していく、仲間はずれにしていくということで、より問題を深刻化させていく
- ・ホームレス 住民が直接関わること難しさ
- ・外国人との共生 犯罪が増えている
- ・外国籍住民の生活について 外国人は高齢になったり、障害者になったら母国へ帰ると思っている。 そうできないこともある 必要性
- ・世代間のバリア
- ・障害者（特に知的）のバリア

4 障害者は決して他人事ではない。病気、事故、高齢化等様々な原因でだれもがなりうる事である。

- ・障害者の多くは先天的なものではなく、障害には病気や事故、特に高齢になるといった後天的な原因から。
- ・保健師の地域における活動の50%が精神障害の福祉に関わること
- ・要介護高齢者の約半分は程度の差があるが、認知症
- ・心の病気は誰が発症してもおかしくない。
- ・心の病気は病識 自分が病気だと認識すること が持ちにくい。なかなか相談できない。
- ・「うつ」も大きな問題。50代男性の自殺の原因の7割以上は「うつ」。「うつ」は日常的に発症。
- ・ホームレスは、失職、破産、病気等の要因で

5 私たちは、バリアに対して、余りに無関心、知識がないのではないかと。

- ・ 私たち自身の身近な出来事、経験として感じたことから
- ・ 事態を正確に知らないことで、問題を放置していないか。
- ・ 「社会的排除や摩擦」 社会全体として排除していく、仲間はずれにしていくというこ
とで、より問題を深刻化させていく
- ・ 障害者を隔離してきた歴史 心の壁 どうしたらいいかわからない
学校教育や生涯教育の中からふれあい・交流の機会を作る
- ・ 精神障害者への偏見
- ・ 障害者の多くは地域で生活している
- ・ 施設設置への偏見 怖い、地価が下がる、環境がこわされる 実態として見受けられ
ない。
- ・ 企業だけが冷たいわけではない。国民全体が無関心であることの反映
- ・ 区役所が率先して、障害者といっしょに働く機会を設けることで、実態を知ってもら
いたい。
- ・ 障害者も積極的に社会へ。接する機会が増えることで、相互理解を
- ・ 介助技術の向上、普及も。障害者と介助者、また社会全体で知識や能力を身につける
ことで、随分使いやすくなる
- ・ 心の病気は誰が発症してもおかしくない。
- ・ ホームレス。決して怖い人ではない。知ることによって共存関係ができる
- ・ 実際に交流する機会から学ぶ。
- ・ 子どもの頃から障害のある方を知ることによって、障害のある方と一緒に生活するこ
とが普通の社会に
- ・ 知ることの重要性について共通の認識
交流・実体験から学んでいくことの重要性
- ・ 頭で考えるだけでなく、一緒に過ごすことが一番大事

6 障害そのものを無くすことはできないかもしれないが、障害によるハンディ = バリア は対応できるのではないか。

- ・ 障害があるということは変えられないとしても、障害があることでできないことを対
応する手段はある。手段を作っていくのが社会の役目である。
- ・ 障害者 家族だけでは無理 地域が国が 社会にどのように溶け込んでいくか
- ・ 障害者が普通に生活するためには就労の問題が重要
- ・ 教育・文化・娯楽といった生活の質の向上
- ・ 障害者、ハンディのある人を社会でどう受け入れていくのか。
- ・ 新宿区の障害者の数 1万人程度 16歳から65歳までの働ける年齢のある方 6,700
人程度
- ・ 障害者の多くは、現状は働いていない、福祉的就労だが、将来は一般企業へ就労した

いと考えている。

- ・企業、官公庁の6割は法定雇用率が未達成。また、多くの企業が望んでいるのは若くて高学歴の身体障害者
- ・身体障害者以外の障害者に対しては、就労に関して、ほとんど何の試みもしていない。
- ・わずかではあるが、職場実習等を試した企業の多くで、採用につながっている。
- ・区役所が率先して、障害者といっしょに働く機会を設けることで、実態を知ってもらいたい。
- ・障害者も積極的に社会へ。接する機会が増えることで、相互理解を
- ・障害者の自立支援を進めていくために 受け入れ態勢を整える。一緒に活動する機会を
- ・障害者の就労に関して、企業に対する期待感は強いが、現状は未だ。どうすればいいか。

企業は社会に敏感。社会が人権や障害者に対する社会的義務を果たせない企業に対して何だと思えるようになれば、変化する。

- ・一般企業で就労する場合の受け入れは本当に可能なのか
仕事をを行う上でのバリアフリー
- ・介助技術の向上、普及も。障害者と介助者、また社会全体で知識や能力を身につけることで、随分使いやすくなる
- ・ホームレス 住民が直接関わること難しさ
- ・ホームレス対策 ホームレスと地域住民を対立的に捉えるのではなく、共通の視点に立って解決策を

- ・一人暮らしの方との交流
- ・団地の孤独死対策 住民レベルのネットワーク化
- ・仕組みの整備 行政が果たす役割大きい
- ・新たな地域関係の構築 個々の理解や考えを話し合う場や機会が大切
- ・行政として相談の窓口を確立する。
- ・就労 企業は就労のチャンスを積極的に多く作っていくべき
- ・行政 相談窓口が閉ざされている、閉鎖的である。内容が多岐にわたったり、漫然としている場合にはなかなか相談を受けてもらえない
- ・「権利擁護のしくみの整備」
- ・一人暮らしの方との交流
- ・団地の孤独死対策 住民レベルのネットワーク化
- ・ボランティア週間を設けて交流体験
- ・障害者インターシップ 障害者と区民が接する機会が持てる
- ・地域住民の不安を解消するためにも、地域ぐるみでの対策の推進
- ・声かけなどできることからスタート
- ・インターシップは効果的
- ・障害者の施設がオープンに

障害(バリア = ハンディ)への無関心・知識の少なさ



障害(バリア = ハンディ)は特殊な問題・他人事



問題の潜在化



問題の深刻化



解決への困難

解決のためには…

教育
普及啓発
活動
体験交流
*頭だけでなく、一緒に過
ごすことで得
られる経験が
大事

障害に対する知識の普及

障害(バリア = ハンディ)は病気、事故、高齢、失業等により誰にでも起こり得る問題である。

障害(バリア = ハンディ)は物理的なものだけでなく、制度、社会に広く存在している。

障害(バリア = ハンディ)は私たち自身が作り出しているものもある。

私たち自身の無理解、無関心が、問題を深刻化させたり、解決を妨げている場合がある。

基本的な考え方

障害自体を無くすことができなくても、障害によるハンディを克服する手段を用意する。

対応策として

社会的支援を必要としている人たちへの支援

教育・就労・移動・生活等全ての面において、障害を持つ人が自立して生活できる環境を整備する。

教育を通じて、障害を持つ人への偏見のない人間を育てる。

最終目標

一人一人を、人として大切にする社会